

福島復興支援チャリティ コンサートに取り組んで

——日フィル楽団員による弦楽四重奏——

菊地 英 (福島復興支援チャリティーコンサート実行委員長)

2011年3月11日、東日本大震災、福島原発事故が起き、4年目を迎えた。浜通りの人々は避難指示を受け苦難の避難を続けた。今でも故郷に戻れない県民は14万人、そのうち約4万8千人が県外に避難したままで、震災関連死1660人余と直接死を上回っている。原発事故は収束どころか、放射能汚染水問題など危機的状況である。

福島支援のきっかけをつくったのは、さいたま教育文化研究所に集まってくる福島出身の教職員だった。福島についてよくきくことは「子どもらは、避難先での学校で放射能がうつる。」と言われている。一方福島からは「原発事故は、風化し忘れ去られようとしている。」という声もあり、支援の術はないものかという思いが強くなった。2013年3月11日を期に、福島出身の埼玉の教職員が主宰して、福島復興支援集會を開こうということになり催しものの検討を始めた。大沢進一さんのお骨折りで、三春町出身の山田さんはじめ、4人の日フィル楽団員を招くことができることになった。8月24日に第1回の実行委員会を開き、コンサートの目的、会場、会の名称、主催者、共催者、後援者等の役割分担を決めた。計5回の実行委員会を開き、コンサートの趣旨に賛同する先生方を確認し、チラシ作製、参加券の販売、新聞・メディアへの宣伝、各種団体への支援要請に努めた。実行委員は、福島出身の教職員だけでなく、多くの参加があり、毎回10数名にのぼった。教育研究所や実行委員には「コンサートの趣旨に賛同。参加券が欲しい。」等の声が多く寄せられた。NHKFMさいたまにも出演した。埼教組、埼高教も支援を広げ、子ども招待、生徒のボランティア、学習会などを活発に進めている。第1原発周辺への被災地訪問バス旅行も盛んになってきている。

福島復興支援チャリティコンサートは、県内の退職教職員を中心に多くの県民の参加で成功裏に終了することができた。今日日本で、原発が稼働しているところは一か所もない。電力は間にあっている。原発はなくとも済むのである。安倍政権は昨年来、原発再稼働、輸出を公言し原発推進の姿勢をあらわしてきた。原子力規制委員会は、鹿児島島の川内原発の再稼働を認めようとしている。国民の多くの声は、再稼働反対である。福島県では福島原発全基廃炉を全59市町村が議決した。「オール福島」が前進している。今後とも福島支援を続けたい。